

複雑系政治経済社会の複合的理解を探って

— 俯瞰的科学観としての一つの試み —

鈴木 登

1. まえがき——本論文執筆のねらい
2. 序論——社会諸科学のあり方
3. 歴史進歩主義に対する攻撃と復権への要請
 - (1) K.ポパー・村上泰亮氏・F.フクヤマ氏の諸説を巡って
 - (2) 理想・理念主義および進歩主義の新たな役割
4. ナショナリズムの構成とグローバリズムの位置などについて
 - (1) ナショナリズム・グローバリズム・世界システムなどの構成について
 - (2) グローバリズム・リジョナリズムおよびナショナリズム・世界システムの相克関係について
 - (3) 認識体系としての各基軸・各象限と俯瞰的科学の関係
5. むすびに代えて
——知識・情報についての哲学的世界像を求めて

1. まえがき——本論文執筆のねらい

本論は、平成11年初秋に開催された、島根県立大学開学シンポジウムに提出した筆者の論文（「総合社会科学の措定」宇野・増田編『北東アジア地域研究序説』¹⁾所収）のいわば続編であり、同シンポジウム冒頭における宇野現学長の基調報告を始め、その他の基調諸報告および分科会諸報告で提起された諸概念・諸課題・諸論点を主とし、筆者提出論文を基礎として改めてそれらを捉え直した上で再考し、それらから学びかつその他の筆者関心の論点をも追加しつつ、その改定・拡充を図ったものである。その際、同シンポジウムで取り上げられた諸課題を筆者提出論文の視野から遅ればせながら整理すること、およびその上で筆者日頃からの関心事・テーマにそれらの諸課題を引き付けて論ずることにねらいがある。その限りでは、前者からシンポジウム提出論文との多分の重複・再述を避けられないこと、また後者からいささかトピックス的つまり各項目間で断片的にならざるを得

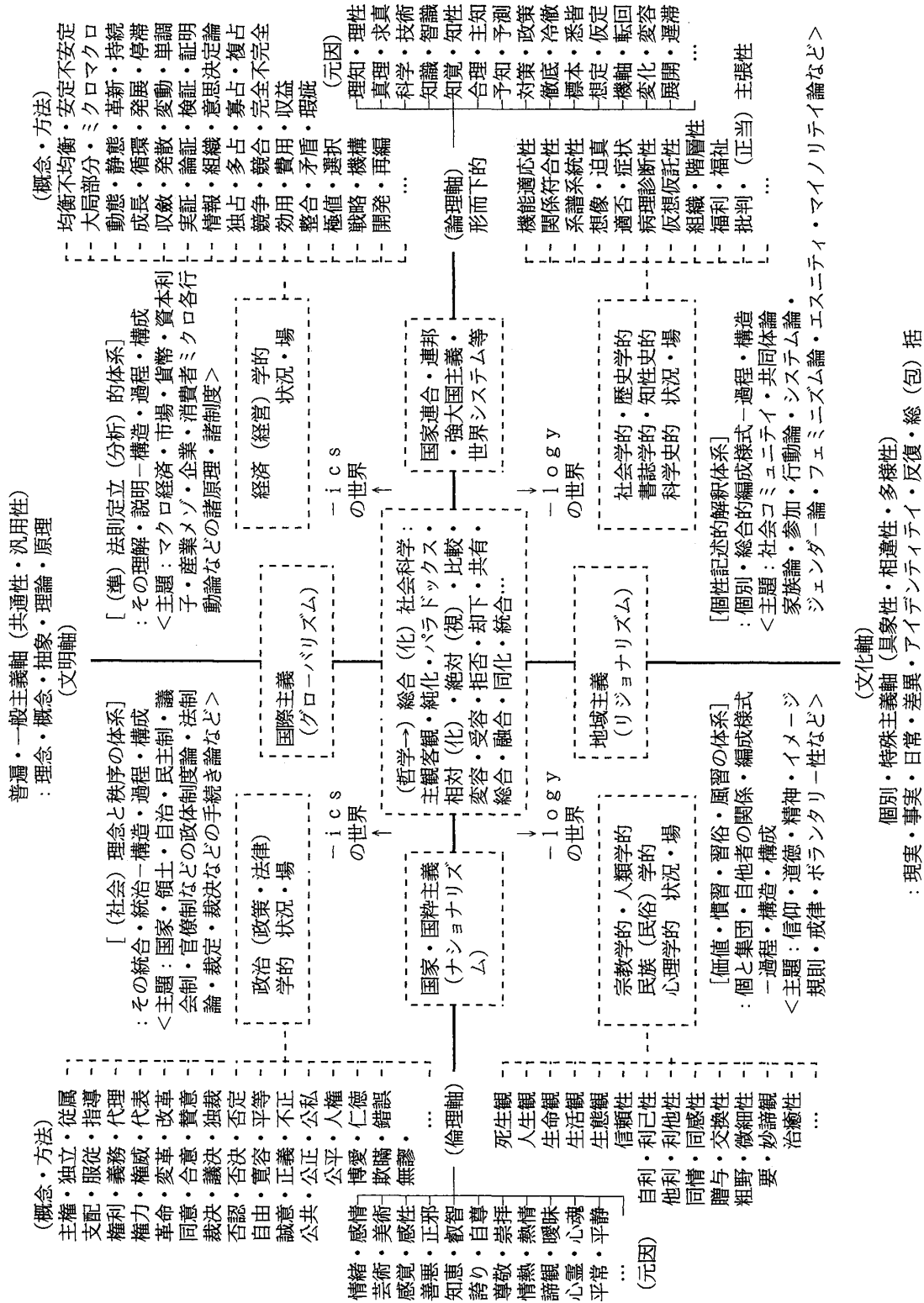


図1 個別社会関連各科学の諸パラダイム (対象領域・スコープ・状況・場)

ないことをお断りしておきたい。

2. 序論——社会諸科学のあり方

個別の社会諸科学は、自然諸科学と同様にそれぞれ固有にして特徴的な対象領域と概念・方法をもっている。少なくともそれぞれが誕生した起源にあっては、その誕生・起源の根拠としてそれぞれ固有であり独自性が主張されたし、当初から独立したものではなくとも、その後の関連範疇での諸業績が積み上げられることによって、他の包摂した広義の学問各領域から区別される、その固有性がその根拠とともに主張され、単に主張されるに留まらず、それ相応（あるいは当初想定された以上）に諸実績が蓄積され、学問領域として独立した地位を与えられてきた（その地位は一般的には大学における「学部」としての独立・設立という制度が保証されることによってであった）。それぞれの社会諸科学の、現実社会との関係でそれらを概括すれば、経済学は「法則定立」的な、またはそのための「分析」的な体系の樹立（それと敢えていえばそれを基とした現実諸課題・諸問題の治癒と解消という政策体系のそれ）を目指してきた。また、政治学は、「統治」の体系として、「理念」とそれを基本とする（法制度を含む）秩序体系の成立・維持がその課題・目標とされてきた。社会学は、「様式構造」と「適応性」などを中心に、「個性記述」的な「解釈」体系の創立とそのための営為が図られてきた。個々には人文あるいは自然科学に分類される場合が多い宗教学、人類学、民族学あるいは心理学それぞれを社会科学に加えることには異論の向きもあろうが、隣接もしくは近接諸分野、たとえば「経済人類学・同心理学」・「宗教社会学」・「社会心理学」・「政治心理学」・「民族政治学」などは関連領域として固有の研究分野であり、それらを括ると、いずれも「価値・慣習」あるいは「習俗・風俗」の体系として括られよう。それらを普遍・一般を原則・プリンシプルとする「文明軸」対個別・特殊を旨とする「文化軸」を垂直縦軸とし、理知を基調とする「論理軸」対情感を主旨とする「倫理軸」を水平横軸とし、それぞれで区切ると、上記の各社会科学は各象限にほぼ相応に収まることになる（図1一同図は上記論文掲載におけるそれを若干整理したものである）。

「ほぼ相応に収まる」ことは、それぞれの個別社会科学は、それぞれの各象限での、いわば純化された各分野・各領域で最も特性ある実績を上げてきたという事情を語ってくれているのであり、各個別同科学の能力・特性が最も効果的に発揮される、またされた「接近」の方法・概念を積み上げてきたといえる。

しかし、以上のような作図にともなう明らかに存在する以下の問題点もある。まず、第1に、「政治経済学」あるいは「社会経済学」など、従来からも各象限に跨る領域も厳然と存在し、固有の領域に留まる諸業績と匹肩する以上の学問業績を上げた諸例（前者についてはK.マルクス、後者についてはM.ウェーバーが上げられる）を見逃すわけにいかない。が、ここでは、それらは各象限分けによる特性分析作業の次に予定される、各軸・各象限

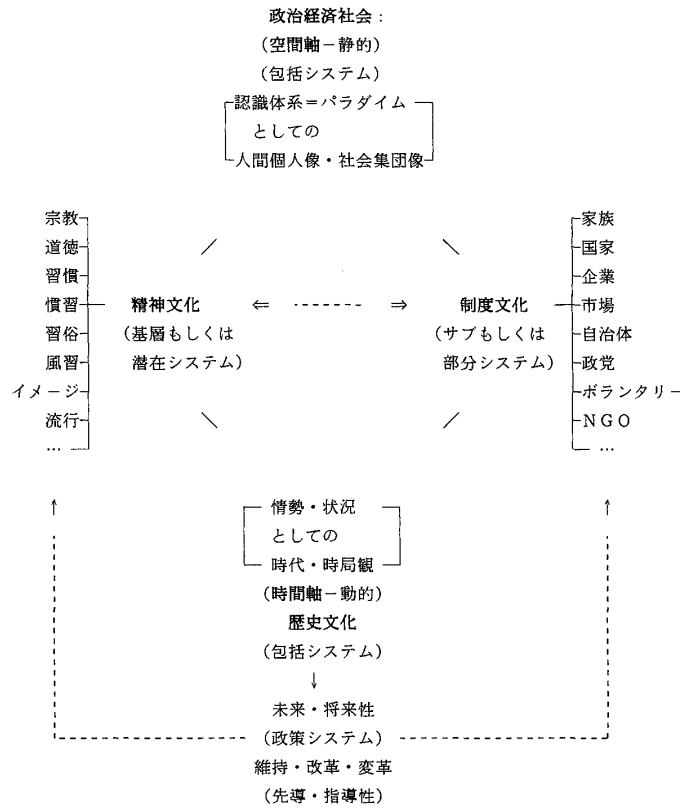


図2 制度・精神各文化と時空軸の関係

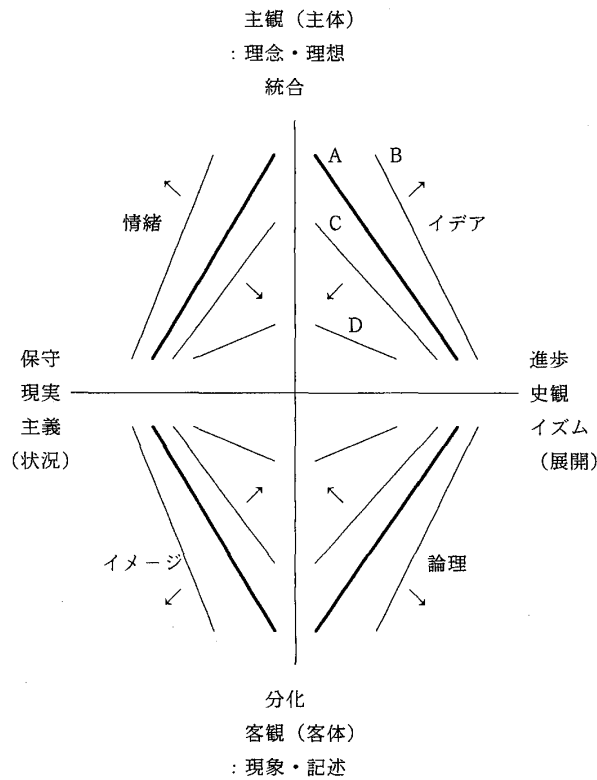


図3 歴史進歩主義の役割——主体統合における理念と論理

が折り重なるメタあるいはスウパ-ストラクチュア体系のこれまでし遂げた極地ないしは巨峰とだけ位置付けておこう。

第2の問題点としては、各象限は平面上で区切られた固定的かつ静的領域区画であり、それぞれの分野が辿ってきた系譜的かつ動的展開が示されていないではないか、または示すとするばどのような構図が描けるかということである。とくに空間と時間とを接続する世界観をどう構成するか、という問題である。

それには取り敢えず以下のような構成で思考の順序を大枠組み立てることが考案される。

人間の頭脳認識活動は、時空三次元からなる現実を一挙に解明することは難事である。そこで社会科学がその認識の対象としている現実をまず政治経済社会の空間域とし、それを認識パラダイムとしてどう捉えるかという課題が与えられる。その主内容は人間（個人）像であり、社会（集団）像である。人間個人は精神文化（宗教・道徳・風習・イメージなど）をその基層もしくは潜在的に秘める（かつときには慣習・習俗・流行として表層化する）システムである。一方社会集団が構成する諸制度は、社会トータルが示す全体像の部分もしくはサブシステムとして、現代では多様な組織編成がなされ、それらは家族としての基礎的単位をはじめ、企業・市場・政党および政府・自治体などからなり、総体として国家が形成されている。前者の精神諸文化は後者の制度諸文化の組織編成に影響を与え、後者の制度諸文化も前者の精神諸文化に影響を与え合うという相互関係を取り結んでいる。

自然条件（とその変化）など、その他からの影響を受けつつ精神文化ならびに制度文化の双方は総合されて時間軸として評価される「歴史文化」を結び、情勢・状況としての動的時代観・時局観が形成され、それは維持・変革などの過程をとめない変化・変容を示すことになる（図2参照）。

これまでの個別社会科学は、自らの対象領域を設定し（ある場合にはそれを固定し）、独自の、あるいは他の分野で考案された諸方法を援用し実績として大きな学問的業績を蓄積してきた。それも、現実の経済政治社会との関係をみれば、その動向と決して無縁なはずはなく、それも、経済が社会の存立にとって不可欠に重要な場合には、社会科学の中で最重点が置かれてきたし、政治が先行されなければならない時期には政治学もまた大きな進歩を示してきたのが実情というべきではなからうか。経済学が社会科学の「女王」と称され、「帝国主義」と謳われたのもそうした現実からの課題が反映しある程度期待された、ときにはそれ以上に成果を上げたからと、肯定的に考えることもできる。それらは近代社会成立・形成期時における政治学および経済学の累々たる諸成果をみるとき、また成熟期になっての社会学の誕生と活躍も、そうした見方を是としてくれよう。現実社会は、人間の認識になる科学の世界と異なり、もともと包括的かつ全体的、あるいは総合的ではあるにしても、時代・時期・時局によってはいわば政治（学）の季節、経済（学）の季節、さ

らには社会(学)の季節を迎えたのであり、こうしたそれぞれのいわば出番としての機会に、個別の社会科学にあってもそれぞれの特徴的な接近方法、つまり概念・方法がいかになく発揮されそれら現実が要請する諸課題に答え得た各叡知をそれぞれ発揮し得たと云えようか。大まかにいえば、各個別社会諸科学は時代と時節・時局に応じて誕生し、各パラダイムを変換してきたのではないだろうか。

しかし、現代社会が進行し政治、経済および社会の相互関係の範囲が拡大し深化し相互の関係が複雑に入れ混み合うにつれ、これまで個別社会科学が応え得た現実の経済社会は、より複雑化・複合化された構造に変化・変質・変容・変換してきている。それがどのような過程とメカニズムでそうなってきたのか。一般論として個別科学がそれに応えることは難事とも不可能ともなる事態に突入しているのではなかろうか。各個別科学はなおその一定の役割を果たし得るとしても、そのままで有効性は限定されざるを得ない。とすれば、そうした複雑化し複合化された現実の政治経済社会を分析するためには、これまでの個別社会科学にあってもそれらが総合化されなければならないことは云うまでもない。その総合化は、個別専門性を足掛かりとしてどのような道筋で可能でありかつ有効なのであろうか、あるいはそれらの個別専門性とは別の概念体系および方法でなければならないのであろうか。総合化手続きで要請されるメタ性なりスウパ-ストラクチュアなりの体系はいかなる構造・構成を求められているのであろうか。たとえばポスト・モダニズムの脱構築論はそのための前提足り得るのであろうか。

ここでは、以下、表題の副題につけたように、俯瞰的科学観の立場に立ちたい。というのも、人間の認識構造は、複雑化し複合化された現実の政治・経済・社会をいきなり一括して一挙に複雑なまま理解に収め切るようにはできていない。それを可能とするには、以下のような手続きもその1つとして考えられる。従来からの個別各社会科学の諸成果を正しくかつ効果的・的確に活かすためにも、それらを可能なかぎり視野に収め、それらを知的ストックとすることであり、それらをメタ構造に組み立てる、つまり複合し、重合し、総合することである。それらを有効に仕遂げるためには、各個別科学の特性と限界を正確に把握して置かなければならない。図1はそのためのいわば第1の前提であり階梯ともいえるものである(つまりこれのみで終始するわけではない)。

こうした過程に進む段に当たって俯瞰的科学観に立つことは、そうでないことによる難点を以下のような経過でその克服を図ることができるというメリットがある。

- 1) 見方、観点、それは具体的・具象的な事柄・現象についての解釈から世界観に及ぶまでの、広汎な範囲に亘るが、いずれの場合でも、一つの、一方的なそれらにのみ取り付き、それに拘り執着・固執することにもなう偏見を除去してくれる。別な言い方をすれば、頑迷な、「迷」の元を断ち、固執にもなう神話化への防禦となる。
- 2) それぞれの見方、観点を、認識的によりの確・正確に位置付け、それぞれの相互位置関係を明らかにしてくれることに役立つ。

- 3) 創発的な新たな知見、つまりより創造的な発見に繋がり易い認識場・状況を造りかつ設定できることを可能とする。
- 4) 既往の知見と新たな創造的な知見の関係を明確にかつ適格に指摘できる姿勢を提供してくれる。
- 5) 誤謬の所在を指摘することに容易に道を開くことができる。
- 6) 科学と非科学、あるいは科学およびそれらの諸方法そのものを否定する立場をも視野に取り入れる立場を提供してくれる。
- 7) 科学と非科学の区別、あるいは両者の連続・非連続の関係にある、その態様を示すことができる。
- 8) それらを総合して、眺望的な視野を開くことができ、全体を掌握できる可能性を拓くことができる。

以上は、学問対象領域を考慮せず、一般的に科学の世界と非科学の世界を区別したままの俯瞰的科学観のメリットを掲げたものであるが、それも加えて俯瞰する側つまり俯瞰者がどの位置に立ち、どこまでを俯瞰し眺望するか、という立場の問題がある。科学としてはここで取り敢えず一応の立場としている社会科学以外にも、従来からの分類では自然科学および人文科学がある。また近年の科学方法論の成果として、ゲームの理論や複雑系科学は、分野は固定されず幅広く各分野で適用されそれぞれが（分析的）有効性を発揮しており、また、言語論転回²⁾や歴史論転回³⁾が、あるいはレトリック・ターン⁴⁾などが議論される際には、幅広い部門でそれらが議論されているからこそそれぞれが取り上げられてきた。さらに、たとえば経済学（理論）の分野では、集合論や群論など数理論からニュートン引力方程式やオイラーの定理、線形・非線形など各種数理モデルの適用、さらには微分定差方程式ならびに最適化過程のターンパイク定理など、自然科学分野における諸成果が援用されてきた。これらからすれば、その適否問題を問わなければ諸科学間の交渉はすでに幅広く行われてきた。

しかしここでは上述の、現代における社会の複合化および複雑化はそれらを超えた内容と方向さらには加速化の上で進んでいるとの認識から出発している。そこからすればこれまでの諸科学の相互交渉の枠組みを超えた、新たな総合化の手続きと方法、そして何よりもその範囲が要請されているということになる。課題的にみれば、従来の国民国家の枠組みを超えた統合が進む（その過程も一進一退ではあるが）一方で続発する地域紛争、理想や論理を蹴散らしかねないイメージと情緒、貧困からの離脱、つまり成長・開発・発展と環境問題の相克、過去の歴史と経過に拘らざるを得ない近隣諸国問題、一方における不安定な「繁栄」と他方における泥沼化の気配さえみせる経済停滞、世界秩序維持の（過剰ともいえる）責任能力遂行、あるいは併合への圧力と他方での自立と対抗の勢力ベクトル、果ては自爆を含むテロル化等々枚挙にいとまない。

以下では、これら複合的な現実諸課題の幾つかを取り上げ、それらがどのような複合的

要素から組み立てられており、それらを理解するためには、いかなる諸元概念を適用し複合するならばその解明が是とされるか、試みることにする。

3. 歴史進歩主義に対する攻撃と復権への要請

(1) K.ポパー・村上泰亮氏・F.フクヤマ氏の諸説を巡って

第2次大戦後(執筆期間を入れれば同大戦中から)いち早く歴史進歩主義への攻撃を開始したのはK.R.ポパー(『開かれた社会とその敵—Ⅰプラトンの呪文、Ⅱ予言の大潮(1945)』⁵⁾・『歴史主義の貧困—社会科学の方法と実践(1957)』⁶⁾)であった。もう1つあげればF.A.ハイエク(『隷属への道(1944)』⁷⁾、以上書名後の小括弧内年次は原著出版年、以下同じ)であり、それらに先立つが、ここでは以下論旨との関係でG.W.F.ヘーゲルを論ずる故前者をまず取り上げた。

ポパーは、今では周知のように、「プラトン——ヘーゲル——マルクス——ナチズム・社会主義」の系列に波打つ包括主義および/あるいは全体主義は開かれた自由社会(の展開)を閉ざすものとして槍玉にあげ、その閉鎖性および個性的自由を抹殺し抹消するものとして筆法鋭く糾弾した。これらの著作は元来直接にはナチズムにその鋒先・銃口を向けたものであったが、ポパー自身が青年期に短期間マルキストであったこと、そこからの離脱者・克服者あるいは日本流に言えば転向者であったこと、それらを自ら認めその否なるを告白し告発したのであり、その後自伝(『果てしなき探求—知的自叙伝(1974)』⁸⁾)もあり、学会・社会一般でのこれらの著作の受容の仕方は、消滅したナチズムよりはむしろ戦後世界システムの一方の側、ソヴェトを中心とする社会主義体制および独裁的国家(理念)について、マルクスを論ずることによって同体制の予言的末路を適格に論じ当てたとして受け入れられた。ポパーがL.S.E.教授時代にその指導を受けた投資ファンドの雄G.ソロスも最近の著作⁹⁾で『開かれた社会とその敵』についてそうした位置付けと解釈を行っている。ポパー自身もそうした社会での受け入れられ方を容認してか、K.ヤスパースやH.アーレントのように、ナチ全体主義に生じたホロコーストや自由の圧殺性・抹殺性という、人類社会が示した異常性を上の系列で解明を続けるという道筋を辿らず、関心の主たる対象を『科学的発見の論理(1959)』¹⁰⁾から「反証の基準」という科学哲学に合わせ、T.W.アドルノなどのフランクフルト学派との二項対立を主旨とする弁証法を否とする対決、ケンブリッジ分析哲学とくにL.ウィットゲンシュタイン言語哲学との対峙、ウィーン学団による確証的論理実証主義との対抗に意を注ぐこととなった。これら哲学的科学観の究明は、当時の斯界にあって自他の立場の相違と独自性の主張とに発するものであり、B.マギー¹¹⁾も追想しているように、ウィーン学団をはじめとしてポパーの所論が自ら達の論拠に肯定的でそれらを強化してくれるものと思いをしていた。なお、これらの学派の性格にみる根本的な相違は、筆者が作成した図4にみるように、垂直縦軸として上に実在性の世界、下に可能性の世界、水平横軸として右に科学的世界、左にメタ性・スウパア-ストラク

チュアの世界を採り、上の諸学派を位置付けてみると、ポパーを含めて4つの学派は各象限それぞれに明解に分離・分類されることになりその確認ができる。

ところでポパーは、『開かれた社会とその敵』でヘーゲルの「理想主義」そのものを責めているのではない。「余波と結論（合わせて3章）」を含めて全25章のうち、ヘーゲルについては僅かに2章であり（プラトン・マルクスについてはいずれも10章を割いている）、うち1章はヘーゲルのアリストテレスを継いだその論述の難渋さを責め、他の章はヘーゲルが「理想=現実」としているのは、実はプロイセン帝国の現実が理想と一致していることを主張する部族主義が表現されていることを暴露して論難しているのである。ポパーの戦間期における初期社会観について、生前当人と直接インタビューを含めて最近刊行されたM.H.ハコーヘンの新たな伝記的大作¹²⁾にあっても、ポパー前掲書にとってヘーゲルについてはいわば「スケルツォ（間奏曲）」としての意味しかもたなかったのだと結論付けている。これをやや拡張解釈すれば、ポパーにとってもヘーゲル理想主義そのものが現実と沿わないからといって直ちに否定される立場に立っているものではない、といえる。

一方、皆に惜しまれつつ近年亡くなった日本の論客、村上泰亮氏は、その諸著作¹³⁾の随所で、ヘーゲル的自由を観念論の立場に立てば人間精神の極致として高い評価を与えている（念のため村上氏は観念論の立場に立ってはいない）。

氏は公文・佐藤両氏とのマグナム・オパシ共著『文明としてのイエ社会（1979）』¹⁴⁾での多系的文明史観に則り単系史観の基本とする経済発展段階説を否定し、それによって立つ進歩史観を拒否している。氏の晩年の大作『反古典の政治経済学 上（1992）』は「進歩史観の黄昏」と副題がつけられており、文明が多系的である限り、オープン・エンドな開かれた文明史観がその根幹とされることから、その論旨は概ねポパーとほぼ同様な歴史解釈に基づいているが、ポパーと異なり一方では上述のようにヘーゲルにおける「絶対自由」の精神史観を人類が到達した最高の理念として位置付けている。このことは村上体系における多系的文明史観は二つの特徴的性格をもっていることが示唆されていると解釈される。その1つは、ポパー体系では「開かれている体系」が唱えられ体系外からは無政府的諸仮説（あくまで「仮説」段階に留まり、「確証」の段階で優劣位がつけられるものの、最終的には反証されてやがて拒否される——真理は反証でしか確認できない、反証不可能な思想・理論は形而上的で科学ではないとした）の取り込み可能性が予定されるのに対して、村上体系では、過去思想系譜に関してとはいえ、位相階層性の枠組みが準備かつ用意されており、観念論の系譜に最高位としてヘーゲルを据えることに形而上的思想、つまり理念・理想が、実態的裏付けをもつ文明史へ取り込まれる可能性を残していることである。ポパー体系が科学哲学としての認識論段階に留まる「禁欲」的立場が守られる一方、村上体系は、科学的体系としての基準に拘泥せずに文明史としての实在論的世界（観）との関わりが問題とされるのである。

『歴史の終わり（1992）』¹⁵⁾と題して、一見全ての史観を拒否・否定しているかのような

印象を与えて大方を驚愕させたF.フクヤマ氏の所説で注目される論点は、2つある。その1つは、フクヤマ氏はマルクスよりもヘーゲルに高い評価を与えていることであり、2つ目はその根拠としてヘーゲルが人間個人像から出発していることを指摘している点である。

フクヤマ氏は、「歴史の終わり」を説いたのはヘーゲルとマルクスであり、このうちマルクスの唱えたそれは「能力に応じて働き、必要に応じて得る」に至る遙か以前に社会主義国の崩壊、自由市場社会の存続という形で決着がほぼついたとしており、前者の崩壊の根因は空前の権力国家を生み出した全体主義が人間個人に数限り無い妥協と屈辱を強い「魂のなかの気概が徹底的に押さえ込まれたからである」としている。ヘーゲルにおける「歴史の終わり」は、氏によれば、人間個人に占める欲望と本性たる理想・理念を追う崇高な精神の死を掛けた闘いは、究極のところ後者が勝利するのであり、それがもたらす「絶対家族」・「絶対国家」は「絶対平和世界」を実現し、それに至ったときに歴史は終わりを告げるということである。氏の所説を続ければ、ヘーゲルの誤りは、そうした理想像を人間本性としたことにあり、T.ホッブスが描く始源的人間像＝「万人による万人の闘争」のもつリアリティ、あるいはJ.-J.ルソーの説く始源的には「自然人」であっても私有財産制度に不平等の起源をみて人々を「革命」に駆り立てる原動力にも欠けたところにあるとしている。ナチズムと社会主義という2つの全体主義に勝利したとはいえ、フクヤマ氏といえども、自由社会の将来をさほど楽観視していない。「優越願望」が生み出す権威主義がはびこり社会の自由流動性を阻害する一方、「対等願望」も歯止めが効かず横行し、歴史の「循環・横揺れ」は果てしなく繰り返され、「最後の人」としての人間像の先（幌馬車に乗った人類の行く末）は定かではない、としている。『歴史の終わり』と断定した著者がその行く末を最も按じている結論となっている。

(2)理想・理念主義および進歩主義の新たな役割

元来進歩主義革新派に属すべき陣営が退潮と硬直化・保守化を際立たせ、保守主義現実派陣営が改革を唱える現代の思想状況は混迷の度を一層深めている。進歩主義が理念・アイデアを失うか、失わないまでも希薄化させ、それを説く客観的論理を組み立てられない一方、保守主義現実派の情緒・イメージが先行して膨らむことがそのまま許容されればそうならざるを得ない。つまり進歩と結びつかない主観的理念・理想主義は、気分（イメージ）と相違ない保守的主観主義と化すのであり、保守と結びつかない客観的現象理解（つまり肯定）主義は表象的（流れに委ねる）現状記述主義に囚われ、内省のない現象主義と変わりなくなる。以上のことを作図で確認することが以下ここでの作業である。

進歩主義が左翼であるか、保守主義が右翼であるかは今問うまい。唯、進歩史観が「イデオロギズム」として存在し、保守現実主義が「状況」として存在することを取り敢えず仮定することは許容されよう。両者を左右とする水平軸とする（図3）。

人間個人を客体と主体に区別することも、他人と自分が存在する以上許されよう。後者

の主体側からすれば自己同一性（アイデンティティ）を自らもまた他者からも期待し要請されていると考えることも自然であろう（それが実現しているかどうかは一先ず置くこととする）。そこでは自己もまた他者からも分裂しているといわれ、自らもそれを認めるよりは、統一体として理解してもらいたいし、自らもそう思いたいであろう。一方、あらゆる自己からみて他者（客体）は複数存在し、その限りで分化しており、様々な体様とタイプをみせ、自己の側からする理解（仮託を含めて）においても、自者を離れた実態としても、それらが複数で集団として形成される、千差万別であると前提しておいた方が良い。良いというのは、どんな他者が自己の前に現れるかも知れないという不確実な、かつ開かれた世界の可能性を残すという意味を込めてである。この自己統合体を主体もしくは主観とし、上方に位置付け、分化された複数の客体を客観的実在として下方に位置付けて垂直軸として、上で述べた水平軸と交差させることとする。

さて人は統合体としての自己同一性をできれば少しでも向上させたい、理想・理念通りとまではいかないにしても、それに少しでも近づくことを望んでいると考えることも許されよう（望んでいなければ余程の変人か、望んでいたことに挫折した自己同一性の実現に失敗した人——対症療法を必要としているかも知れない、あるいは客体の世界にいわばトンボ返りをした「人——自他の区別が無い、大衆・群衆の中に紛れ込んだ人」となる）。第Ⅰ象限に属する「アイデア」の向上、グレード・アップが図られ多彩で豊富に実現すればするほど、また、第Ⅳ象限に属する「客観的論理」でそれら「アイデア」が説明されればされるほど、進歩主義の展開によってその人間社会は膨らみと厚みを増すことになる（図3では垂直軸の右方）。逆に、理念・理想を追わない、つまりアイデンティティが劣化すればする程、一見分化された多様性は増えるかのように見えるが、それらは多様な論理で区別説明され得ない（ということは表現は多様だが内容・中味は同一・同類）、現象客体のみが記述される、平板で薄っぺらな社会像しか生んでくれない。

一方、現実肯定の保守主義の主体は、展開よりは状況を、「情緒・情念」として受入れ（図3では垂直軸の左側、第Ⅱ象限と第Ⅲ象限）、規範的アイデアを持ち出し取り出してこないしその必要もない。保守主義の客体性は、現状肯定の、状況としての「イメージ」が関わるのみである。もちろん「情緒・情念」といい、「イメージ」といい、それらが豊富で厚みを増せば増すほどその社会を心豊かなものの一つにしてくれる。しかし進歩主義が後退すると「情緒」が「アイデア」を蹴散らし、「イメージ」が「論理」を放逐してしまい、いかにそれが熱情によって支えられていようと、どちらへ漂う社会になるのか不明なそれとなる。また逆に保守主義が後退すると、「アイデア」が「情緒」を食べ物とし、「論理」が「イメージ」を消滅させてしまうギスギスとした窮屈な社会が出現することになる。

進歩史観あるいは進歩主義の役割と効用は、以上によって特徴付けられ、性格付けされ、かつ位置付けられる位相の中で、その正当性と、不可欠なつまり現実を導く役割が発揮されるところにあると考えられるのである（その対として保守主義の正当性と不可欠性も上

により導かれる通りであるが、ここでは退潮著しい進歩主義のそれらのみ強調しておきたい)。

4. ナショナリズムの構成とグローバリズムの位置などについて

図1(個別社会科学の諸パラダイム)に戻る。前述のシンポジウムでは、第Ⅲ象限「価値・慣習・習俗・風習の体系(民族学・人類学・宗教学などの対象領域)」と第Ⅳ象限「個性記述的解釈体系(社会学・歴史学などの対象領域)」が重なり、その2つの象限を区切る垂直軸に跨る位置に「リジョナリズム(地域主義)」を設定した。しかし、同シンポジウム(および翌2000年度に開催されたシンポジウムを加えて)で議論されたのはそればかりではない。「ナショナリズム(国家主義)」・「グローバリズム(国際主義)」に加えて、それに歴史的に様々な形態を示し現代にあってもEU連合など様々な組織編成が模索されている「集合体」がある。その集合体を歴史的にみれば、帝国主義(宗主国・植民地の支配・従属関係)を基礎単位とした「世界システム」、冷戦体制下のような二国を中心とした対立構造、もしくは同体制崩壊後の米国一国の主導体制あるいは「強大国主義」、それとは必ずしも同一ではないにしても「覇権国家主義」、もしくは国連(UN)体制、さらにはEUなどのような「国家連合もしくは国家連邦主義」などである。それらを筆者の「普遍・一般(文明)——個別・特殊(文化)垂直軸」および「論理——倫理水平軸」の交差で位置付けると各軸を跨り隣合わせの各象限に及ぶ領域で画され、図1で示されたようになる。つまり第Ⅰ象限と第Ⅱ象限に跨る区画に「グローバリズム(国際主義)」、第Ⅱ象限と第Ⅲ象限に跨る区画に「ナショナリズム(国家・国粋主義)」、そして第Ⅰ象限と第Ⅳ象限に跨る区画に「国家連合・国家連邦」あるいは「強大国主義」、その2つをまとめて「世界システム」として一括してくれる各(地球)空間的諸概念である。ここでは以下、それぞれがそのように位置付けられる理由とそれらの相互関係について論じてみたい。

(1) ナショナリズム・グローバリズム・世界システムなどの構成について

まず「ナショナリズム(国家主義)」の構成についてである。E.ゲルナー¹⁶⁾によれば「ナショナリズム」とは、政治的なつまり国家の単位と民族の単位の同一化を図る政治運動であり政治的原理であるとしている。つまり国民国家の形成であり、(西欧)先進国であれば近代化の過程が始まる直前の、絶対王朝の成立とともに、あるいは近代化の過程で、途上国では第2次大戦後の植民地国からの独立の過程でそれぞれ形成されてきた。冷戦構造つまりイデオロギーの崩壊後、民族・人種単位が細切れモザイク状に分断されている地域では、両者の一致を求めて激しい紛争が絶えない(コンゴ・コソボ・インドネシアなど)。また、E.J.ホブズボウム¹⁷⁾によれば、「ナショナリズム」は強弱という「質」の問題つまり独立した主権の確保という課題と、それが及ぶ空間的幅・範囲つまり領土という「量」の問題を不可欠にもなっている。加えて民族単位の大さに相対的な格差があると、数多い弱小民族を抱え国家単位と民族単位は必ずしも一致しなくとも国家秩序維持は可能であ

る（中国）。しかし「量」の範囲が余りにも広範になるか、宗教・民族・人種・言語などの純化運動と重なると周辺地域では「独立した主権・自治権」をめぐる紛争・トラブルを生じかねない（イスラエル・パレスチナ紛争あるいは中国と新疆自治区・チベット問題）。これらの「国家概念」は、B.アンダーソンという『想像的共同体（1983, re.1991）』¹⁸⁾の説くそれと矛盾しない。以上のことから図1では、「ナショナリズム」が第Ⅱ象限と第Ⅲ象限に跨る領域を占めることになる。

つぎに国際主義つまり「グローバリズム」は、第Ⅰ象限と第Ⅱ象限の間、しかも「文明軸」に沿って設定される。しかし「グローバリズム」は、民族単位の問題とは概念的には切り離されており、「市場制度」あるいは「多国籍企業」、さらには金融の国際化など、より普遍的・一般的な（影響範囲も地球規模に及ぶ）諸制度と関連をもつことになる。もちろん巷間喧伝されるように、国際化・グローバリズム化のより一層の進展とその加速化は「高度情報化」と密接な関係をもつ。国際的な秩序・組織の形成が遂行されるにしても、それが国家主権を侵害するものではなく「相互互惠主義」が旨とされる。なお、「国家連合」ほどの強力な紐帯力をもたない政治的友好関係および／あるいは経済的相互特惠関係など「同盟」関係もここに分類されよう。「グローバリズム」は、概念上、本質的には「ナショナリズム」と正面から対抗関係に立つわけではなく、両者は衝突したり軋轢を生ずるはずのものではない（「グローバリズム」とぶつかるのは後述のように「リジョナリズム（地域主義）」である）。

第Ⅰ象限と第Ⅳ象限の間に跨り位置付けられるのは「世界システム」・「強大国主義」・「覇権国家主義」・「国家連合もしくは国家連邦主義」などであり、これらがここに一括して掲げられるのは、図1の座標軸ではそれらをさらに細分類できる基準が設定できないことにもよる。

しかし、政治的支配と従属の関係をともなっていた帝国主義は解体し、政治的紐帯は解き放され、現在生じている「世界システム」の形成は経済関係を中心としている。「強大国主義」と「覇権国家主義」とを区別する基準は微妙である。領土拡張をとまなう「強大国主義」を「覇権国家主義」と仮に定義できるのかどうか、少なくともその手段として「武力」を行使すればどうか。「ナショナリズム」と対峙し対抗関係に立つのは、正にここに位置付けられる概念である。「国家連合」か「国家連邦」かは現にEU連合における仏独の争点となっている。前者が国家主権を損なわない（国連も「連合」と称している）、後者が超構造としての「連合体」に主権が委譲され、それまでの「国家」は「州としての自治体」になるのか、つまり「サブシディアリティ（subsidiarity）」が「従来国家」に付与されるのか、それとも、マーストリヒト条約の内容のように、連合体が「従来国家」が主権を行使できない主権にのみ限定されるのか、注目されるところである。

ところでこれらの「世界システム等（一括して）」が第Ⅳ象限と関連することには説明を要しよう。I.ウォーラーステインは最近の論文¹⁹⁾（『ザ・ブリティッシュ・ジャーナル・オ

ブ・ソシオロジー (Vol. 51, No. 1. Jan./Mar.2000)』の「次のミレニアムにおける社会学」特集号に寄稿したもので、過去2世紀に及ぶ社会学の系譜を振り返りながら、「世界システム」が変われば人々の「知識・理解の体系」が変化することを指摘している。ウォーラステインは、'60年代以降「社会学 (sociology)」が「社会科学 (social science)」になり、多少曖昧性を残しつつも同領域に関連する概念が拡張されたのには、改めて統合された体系に組み直して現実の理解を一層適確に図ろうとする理由根拠がある、としている。とくに近時「歴史社会学 (historical social science)」が注目されているのは、歴史を扱うことがそうした政治的、経済的かつ社会的な諸分野を、さらには人文科学との関連も再統合せざるを得ないからであり、その契機として「(社会学研究についての) グローバリゼーション」、「複雑系の科学」および「文化諸研究」の展開に求めている。とくに「文化諸研究」の展開は、科学に関するこれまでの「客観的かつ公式的合理性 (objective&formal rationality)」を求め、それに依拠するあり方から「実在的かつ主観的合理性 (substantive & subjective rationality)」(それが間主観性の価値にまで至る過程)を研究・分析しなければならないとしている。

ウォーラステインが述べていることをやや敷衍していえば、近時では冷戦構造が崩壊したこと、また、過去に遡れば帝国主義が一齐に解消し植民地諸国が独立したことは、人々の思想体系、つまり「知識・理解体系」を激変させたといえる。さらにいえば、潜在的に変化していた「実在的かつ主観的合理性」が「間主観化」したと、逆の過程で因果を捉えることも可能なのかもしれない。

(2) グローバリズム・リジョナリズムおよびナショナリズム・世界システムの相克関係について

よくいわれる「グローバリズム (国際主義)」は、それが政治経済的側面である限り、「ナショナリズム (における国家の独立主権)」と直接対立・対抗する理由にはならない。上述したように「友好関係」・「同盟関係」は、国家の独立主権と抵触するものではないからである(「軍事面での両者の相克があるではないか」とする反論ができるかもしれないが、それは「ナショナリズム」と「グローバリズム」との間ではなく、下記するように「ナショナリズム」と「世界システム」との間で生ずるかつ生じている相克である)。国際間にみる多くの相克関係は正確には「リジョナリズム (地域主義)」の構成、つまり民族・宗教・言語・人種など、総じて「文化諸領域」が生じていることといわなければならない。各要素にあつて均質的な「リジョナリズム」は「ナショナリズム」と一致することになるが、その実「リジョナリズム」は、「グローバリズム」との間で潜在的、顕在的に多大な緊張関係にあるといわなければならない。前者「リジョナリズム」の個別・特殊性と後者「グローバリズム」の普遍・一般性との相克である。しかし、開放体系である限り、グローバル性の優位性は否定できない。「リジョナリズム」としての課題は、グローバル性としての普遍性・一般性を受容しつつも、自己のメリット・特性をその中でいかに生か

すかというにとになる。なお、「ナショナリズム」と「リジョナリズム」との関係にあつて、上記のように均質的ではない場合、あるいは相互に階層関係にある場合、均質性をもたらすにも、階層関係の解消にも多大なエネルギーを必要とする。近代化過程における国民国家の成立・形成の経過が、どの国にあつてもそれらを如実に語ってくれている。

しかし、「ナショナリズム」が真に対立・対抗関係に立つのは「世界システム」との関係である。「世界システム」における組織編成に際しての大部分の事柄は、「ナショナリズム」がもつ本質でもある主権問題とその独立性に抵触せざるを得ないからである。

前出の村上氏は、「世界システム」を、それがネイション性を「超える（トランスする）」という意味を含め、「トランスナショナリズム」という用語を用いている。村上氏は、「ナショナリズム」の成立を前出ゲルナーと同様に産業近代化の過程と対応させており、覇権安定性などそれを超えた統合化への動きを吟味し新しい国際システムのシナリオを「多相的な自由主義のルール」として国際公共財（たとえば世界通貨など）の可能性などを検討し、EUを含めた開発と多様な連合の予兆の姿を想い浮かべているが、「ナショナリズム」を超えたかつそれを上回る強固な国際組織体を具体的には想定していない（それからすれば村上氏の「トランス」は「移行」のそれに通じ得るものと解釈できる）。

それに対して西川長夫氏²⁰⁾は、的確にもEU統合問題からそれに関係する国民国家の弱体化、つまり国家単位と文化単位の亀裂と近代化過程にあつて果たした相互の補完的役割の喪失を察知している。また田中直毅氏も超国家構造を『スウパア・ストラクチュア(1999)』²¹⁾として世界システム化することを説いている。しかし「ナショナリズム」の弱体化が両氏が想定しているように一挙に進み国民国家が直ちに解体・融解・瓦解するわけではなからう。EU統合化の場合には、言語・宗教も加えて、たとえばアジアなどにみる多様性・多元性とくらべてはるかに均質性と均斉性を整えているとみられるからである。それでもなお、経済的にみれば、フランスの農業とドイツの工業という域内分業の補完関係は、対米に共通基盤を共有させながら、民族的・宗教的には、前者にイタリア・スペイン（ラテン・カソリック）を加えて、後者に東方外交（ゲルマン・プロテスタントを機軸とする——ただしポーランドを除いて、かつ地理的にも）という、それぞれの別なベクトルを抱え、さらにそれらに福祉・軍事の負担問題も絡んで、「ナショナリズム」との相克過程での幾重にもなる曲折と行きつ戻りつの経過を今後控えているとみられる。EU連合にあつても終局にみる統合の形態が明確にその姿を現すまでにはさらに時間を要するものと想定される。ただし、前項でみたウォーラステインがいうように、「システムの変更が人々の知識・思想体系を変える」ことが急速に起こるならばその加速化は促進されるかもしれないし、少なくとも今日までに統合化に向けて人々の考え方を変えてきたとするならば、それへの動きが永久に止まってしまうことはまずないであろうが。

(3) 認識体系としての各基軸・各象限と俯瞰的科学の関係

前出のシンポジウムでも述べたように、図1で水平・垂直両軸で4つの各象限に区分け

し、各個別社会科学をそれぞれに位置付けたのは、各個別科学を孤立化させるために行った操作ではない。この稿の表題および冒頭の項で記したように、それはあくまでそれぞれの個別科学の性格・特性を引き出して、複合化する社会を理解するためにそれら個別科学を複合・重合あるいは総合・統合的に検討することを予定してのことである。ウォーラーSTEINも述べているように、複雑系科学が登場したのも現実が各分野間で複雑な諸関係を取り結ぶに至ったからである。上でみたように、「ナショナリズム」といい「リジョナリズム」といい、はたまた「グローバリズム」といい「世界システム」といい、単元的な要素還元主義では把握できない。それらはいくつもの諸概念の集合から成り立っており、相互に対立・対抗の諸要素、一見位相階層性があるようにみえても関係性の薄いそれら、調和・融合のそれら、さらには補完関係にあり積極的に促進されるそれらがそれぞれに相互に入り交じっている。上で試みたように、それらはいわば俯瞰的に諸科学を展開しそれぞれを的確に位置付けてみて初めてより正確な像を結ぶのであり、それらの相互関係も明確になってくることになる。兆候や傾向が明らかに窺えても、すぐさま一直線に統合が進むものではなく、たとえば「ナショナリズム」は政治学の概念であるからとして政治学のみで理解できるわけではない。また、「リジョナリズム」や「グローバリズム」を経済学だけで把握できるものでもない。認識体系として個別学問分野の世界に閉じ籠もらず、規範的に、かつ、それと現実との突き合わせを図ってこそ命を取り戻せるというものであろう。ここで一旦はそうした個別科学における特性と限界を見定めた上で、それらを複合的に活用することが肝要となる。俯瞰的科学観といい総合化といい、そうした観点に立ち、その上で次の段階として歩を進められるべき手順・手筈というべきであり、そうなるものと考えられる。ここでそれらに成功しているかどうかは一先ず置いて、俯瞰的科学観に立つ総合化が、個別科学の専門性に頼るのみでは得られない展望を与えてくれることだけは明らかである。

5. むすびに代えて——知識・情報についての哲学的世界像を求めて²²⁾

ウォーラーSTEINは、前掲論文で、「社会学」が「社会科学」になり、「歴史社会学」がそこでの活動の中心的存在になりつつあることは、その分野が、歴史を基盤としつつ、経済学（この稿での第Ⅰ象限）、政治学（同第Ⅱ象限）、宗教学・人類学・民族学・心理学などの広く人文科学（同第Ⅲ象限）の各分野への、かつ現在では人文科学の一分野となり文学と同格となった哲学を加えて、科学・学問総合化への途を切り開くものと期待している。ここでは以下、ウォーラーSTEINとは逆の道筋を辿り、哲学あるいは自然科学も加えた哲学的世界像を中心に据え、その系譜によって知識・情報に関しての性格分類を試み、俯瞰的科学観を得る^{よすが}縁としてみたい。

まず、上記した事共と同様、垂直・水平両軸の設定とそれによる各象限の特定である。

垂直つまり縦軸については、上方に経験的「実在性の世界」をとり、下方に思念的「可

能性の世界」をとろう。これは近代科学の方法をめぐる二大潮流であるF.ベーコンを起源とする「帰納法」とR.デカルトを端緒とする「演繹法」が意識されてのことである。前者が「実在性の世界」、後者が「可能性の世界」であることはいうまでもない。つぎに水平つまり横軸に関しては、右方に「科学性の世界」、左方に「メタ性・超構造性の世界」を設定する。「科学性の世界」については、真理性とその証明性とその裏付けとなっており、(下記の第Ⅳ象限とともに)客観性はその基本である。「メタ性・超構造性の世界」は、心理性・形而上性・ガイア性などによって象徴される。こうした垂直・水平両軸の設定により区画される各象限について、まず第Ⅰ象限については「科学的証明の方法・過程の世界」が繰り広げられることになり、主として論理実証主義が取り組んだ世界像が展開される。そこでの知識の性格は、「形式知・表現知」であり、自者・他者で共有可能なそれ(つまり自者・他者の区別を要しない、また区別があっては困るそれ)となる。第Ⅱ象限については「関係性あるいは状況性の世界」が設定され、言語哲学を中心として、確実性・不確実性および両者の関係など、知識の「蓄積・累積性」(とその過程)が課題となる。第Ⅲ象限に関しては、(人間の)内なる世界を対象とすれば「精神分析の世界」であり、外なる世界を取り上げれば地球科学つまり「ガイアの世界——無機・有機の合成」をそれぞれ探索する世界であり、そこでの知識の性格は「暗黙知・創造知」が関わることとなる。この第Ⅲ象限は、第Ⅱ象限とともに主観性・間主観性(自者・他者問題あるいは無我などを含めて)として把握される。最後となる第Ⅳ象限については、「科学」と「可能性」とで区画されることになり、「知識そのものの進化・成長」が取り扱われ、科学パラダイム革命説・反証説・研究プログラム説など、科学哲学が取り組んでいる世界である。

このように、垂直・水平両軸によって各象限を区切れば、両軸の交差する原点、各象限が集中し焦点を結ぶ中心はどういうことになろうか。ことわるまでもなく、それは、その後各象限での展開につながり原始・起源となった、つまり時空についての世界観を生成し形成した元となった考え方となる。ここでは西洋のみを取り上げているので、その根源には、ヘブライズム(新旧聖書)とヘレニズム(ギリシャ哲学)、中世スコラ哲学、近世にはI.ニュートンおよびI.カントなども上げられようが、ここでは、19世紀、それも後半以降、各象限で取り上げられ、繰り開かれた諸説への展開に直接的に連なった「系譜」として後付ける始原者に絞るにととする。その内容を煩瑣を厭わず列挙すれば、現象学(E.フッサール・E.マッハなど)、分析哲学(G.フレーゲ)、確率論(A.クールノー・T.ベイズ・P.ラプラス・G.ブール)、道徳・精神哲学(G.W.F.ヘーゲル・A.ショーペンハウアー・F.W.ニーチェなど)、社会実証主義・社会哲学(A.コント・J.S.ミル・K.マルクス・F.A.ハイエク・J.ロールズなど)、新カント派(E.カッシーラー)、精神・自然各科学(W.ディルタイ・H.リッカートなど)、歴史社会学(M.ウェーバー・J.A.シュンペーター)、科学方法論(H.ポアンカレ・G.バシュラール)、相対性理論(A.アインシュタイン)、量子力学(N.ボーア・W.ハイゼンベルク・E.シュレジンガーなど)、(分子)生物(行動)学・遺伝学(C.R.

ダーウィン・M.デルブリュック・K.Z.ローレンツ・J.D.ワトソン＝F.H.C.クリック・R.ドーキンスなど)、散逸構造・複雑系・経路依存性 (R.トム・I.プリゴジンなど)、情報科学・サイバネティクス (N.ウィーナー・J.v.ノイマン)・数理論哲学 (D.ヒルベルト・A.タルスキー・K.ゲーデル——不完全性定理) などであろう。

フッサールの現象学やマッハの感覚分析によって、観察・経験という現実世界が科学認識と結びつく土台がならされると、フレーゲは現実を認識的分析によってどのように切り開くかに取り掛かった。分析的に知識・情報を利用・活用する立場を哲学的論理の上で主題とした嚆矢はフレーゲ (イエナ大) であった。「すべてはフレーゲから始まった」とされるいわゆる分析哲学の開始である。その後続いたB.ラッセルおよびA.N.ホワイトヘッド (共に当時ケンブリッジ大学) は、定義・概念を正確・明確にして出発すればこの世のことはすべて解明されるとした。しかし、定義・概念を正確・明確にするということは、当該のそれらから他のことの混在を除去してそれらを純化することに他ならない。純化すればするほどその次の段階に要する、あるいは現実操作との対応過程で他の要素が混入してこざるを得ない。この「パラドックス」に気づいたラッセルはフレーゲにそのことを書き送る。周到で慎重な性格の持ち主であったフレーゲは出版直前であった自分のほぼ一生を掛けた仕事が一挙にひっくり返されるそのことを知って愕然とする。

後に、マンチェスター大学でジェット・エンジンの原理を発明していたL.ウィットゲンシュタインが哲学を学びたいとフレーゲを訪問すると、「ラッセルの所で学びなさい」と助言するのみであった。ウィットゲンシュタインが夏期休暇でケンブリッジからウィーンに戻っている間に第1次大戦が始まり彼も出征したが、1週間で終わると誰もが考えた戦争は長期化し、ウィットゲンシュタインは捕虜となる。収容所で書き上げた学位請求論文が言語哲学の出発となった『論理哲学論考 (1922)』²³⁾ の原稿である。彼は師ラッセルの説を逆立ちさせ、当初から正しい定義・概念を設定できるなどと無理なことは言わないでくれ、人間は、母親と幼児、幼児から成人に至る過程で、人々とのゲーム交渉的なやりとりという関係性を通じて妥当な概念も、それを正確・的確に表現する言語をも獲得していくのだと主張し、論文査問のためブラッセルにきて自説を弟子にひっくり返された師との再会は口論のみで終始してしまった。その後ウィットゲンシュタインはウィーンに戻って、資産家であった父の遺産を全て姉に譲り、近郊の村で小学校教員をしたり寺の庭番をしたり姉の住館の設計をしたりであったが、捨て置けないケ大ではF.P.ラムゼイを派遣し「アフォリズム」で論述された同論文を祖述させ、J.M.ケインズが費用を負担しウィットゲンシュタインをケンブリッジに戻し、その後引退したG.E.ムーアの跡を継いで同大学道徳学教授に就任させるにまで至った²⁴⁾。ウィットゲンシュタイン哲学はオクスフォード大 (G.ライル——言語と心・想像²⁵⁾・J.L.オースチン——言語と行為²⁶⁾ の関係など) にも影響を与え、20世紀哲学の一つの根幹となる。

一方、ウィーンではキールから招かれたM.シュリックがリーダーとなり、『科学的世界

把握 (1929)』²⁷⁾ を目指し、感覚的経験とそれを記述する論理的妥当性の確保とその証明を内容とする「論理実証主義」運動、つまり「ウィーン学団」が組織された。同学団の課題は、アプリアリ (証明を要しない) か仮説 (証明を要する) かという経験内容 (対象)、論理的記述の方法、およびその妥当性の検証・証明と、およそ科学的体系を構成する全範囲に及ぶ。したがってこのうち、どの構成要素に関する言明・言説でも自らの立場を強化してくれていると受け取りがちであった。基礎を共通にするラッセル・ホワイトヘッドの数理主義はともかくとして、ウィットゲンシュタインおよび後述のK.ポパーの反証主義ですら自らの陣営を強固にしてくれる見方だと「誤解？」したようである。ウィットゲンシュタインを学団研究会に招聘した際、当人が後ろ向きに腰掛け、タゴールの詩を朗読しても彼の奇矯のせいとし、ポパーが反証主義は論理実証主義に「とどめを刺した」のだとメンバーに何度説得しようとも首肯しなかった²⁸⁾。しかし、その壮大な関心領域と科学信仰は、多くの哲学者達を引き付け、英国からはA.J.エイヤー (オクスフォード大)、米国からはW.V.O.クワイン (ハーヴァード大) と後の大立て者となる人々の若き時代における留学先となった。とくにクワインとウィーン学団最有力メンバーの一人、R.カーナップの友好な交際は後々まで続いた。もともと論理数学から出発したクワインは、広範な哲学分野に通暁しており、彼の哲学は「ホーリズム」との見出しがつく。ここでのテーマ、知識・情報の世界との関連では、「全体知」・「総合知」(知識のネットワーク)として特徴付けられる。彼は、2000年12月25日に92歳で亡くなった。『ゼ・エコノミスト (2001.1.13.号)』の「オビチュアリー (追悼記)」は個人の功績を讃えて印象的であるが哲学を専門化してしまったという責めも記している。彼は別図の第Ⅰ象限と第Ⅱ象限にそれぞれ関わる課題、「事実——科学」と「意味——哲学」について、「両者の相違は相対的なもので、両者を分ける本質的な基準はない」という言葉を残し、哲学と科学の総合化についての可能性を示唆している。

哲学者同志の交渉は、全てがカーナップ=クワインのようにはいかない。ポパーがケンブリッジに招待されて反証主義について論述すると、ウィットゲンシュタインは「それでは哲学の主題はどうなってしまうのだ？」と火搔き棒を振り回して脅迫したそうである (同席したラッセルがポパーをとりなした)。ここで設定した相互に異なる象限に属したことつまり世界を異にしたことにより、それぞれの立場はそれぞれの存在が掛かっているというべきか。そのポパーでさえ、弟子I.ラカトスがライヴァル——T.クーン寄りに立論 (「研究プログラム」) した後ではその弟子相手に口もきかなくなったとのことである。

第Ⅲ象限 (メタ性と可能性の世界) に進もう。多くの優秀な兄弟妹をもち、化学・経済哲学・科学哲学広範な分野で活躍したM.ポランニーは、『個人的知識 (1958)』²⁹⁾ で、他者には (容易には) 伝えられない「暗黙知」の領域に踏み込んでいる。それは、創造や発見をもたらしてくれる「知の世界」であり、それが実を結ぶにはある程度「偶然性」も作用する (日本では九鬼周造の対象とした世界像——「いき」の構造と対比され、「勘」・

「こつ」などもこの範疇に属しよう)。

他者が容易に入り込めない世界とは「精神世界」に通ずるものである。S.フロイドは、自者さえ入り込めない無意識の世界(「リビドウ」)を切り開いてみせたが、その師と袂を別ったC.G.ユングは意味と無意味、意識と無意識が交差し交流する、深層心理の世界を往復してみせた。これらの精神世界を人間発達と関連付けたJ.ピアジェもこの区画に分類されよう。

内的心理と外界との関係として枠組みを広げれば、M.ハイデガーの「死・無と日常性」・弟子H.G.ガダマーの「記憶再生」の世界、さらには実存主義(J.-P.サルトル・K.ヤスパース・P.リクールなど)、心理問題に限れば、自己同一性(アイデンティティ)のE.H.エリクソン³⁰⁾、探索心理³¹⁾(J.ブルーナー)、言語哲学の良き理解者・解釈者であった意味論のS.A.クリプキ、さらには、構造システムから主体論を展開する構造人類学(L.ストローズ)もこの位置にあらう。

とくに現存の哲学者として注目されているのは、トランス・パーソナル(間主観性)を説くK.ウィルバーであり、『科学と宗教の統合(1998)』³²⁾・『全てについての理論(A Theory of Everything, 2000)』³³⁾においてそのメタ性が縦横に発揮されている(「科学と宗教の関係」ではJ.ポーキングホーンなど³⁴⁾も上げられよう)。

また哲学的世界像の分類を図るこの稿の枠外ではあるが、地球システムとして無機と有機の相互作用とそのバランスを説く「ガイア仮説(J.E.ラヴロック)」³⁵⁾をここに上げておこう。

最後に象限Ⅰ～Ⅳに共通する「情報」関連の対象項目として「確率論」³⁶⁾の世界を一応瞥見しておこう。第Ⅰ象限に属するウィーン学団つまり論理実証主義の立場に立つ確率論(R.v.ミーゼス・H.ライヘンバッハ・R.カーナップ)の性格は「客観確率」³⁷⁾であり、それは最終的には無限回数の試行でしか証明されない。第Ⅱ象限での「主観確率」は、ある意味ではベイズやラプラスの伝統に返り、人間が実在性の立場に立って将来の可能性をどう見込むかという、経験的観測可能な世界に取り戻している。その上で帰納法・経験論の立場にあるケインズ³⁸⁾はそれを蓋然性(「蓋然知」とも称し得よう)として捉え、知識の蓄積による信条の程度として把握する。弟子ラムゼイはそれに異論を唱え、知識の蓄積は「専門知」が実現しているのであるから(辞書的知識を母数とする、知識の集積・改訂を必要としない純主観的な)「信条の程度」のみで可とした。第Ⅰ象限と第Ⅱ象限との、確率論をめぐる客観・主観をめぐる論争は、多くの論者に引き継がれて続いている。第Ⅱ象限に位置付けたウィットゲンシュタイン³⁹⁾は、確定性の世界に足場をおき、不確定性の世界を認めつつも「語り得ぬことについては沈黙すべし」との言を残している。

第Ⅲ象限では、その事後的確率値は極端に言えば、0か1の世界であり他の象限でのように0～1間の世界としては捉えていない。前述したように情報に関する確率論の世界というよりは、「偶然性」の世界として事態に処しており、援用する場合でも上述のケイ

ンズのように事前的には「蓋然性」を適用する範囲に留めている。事前・事後の問題として事後的に限定してみれば全てが0か1の世界とみなして差し支えない(0~1間の世界像が成立するのはあくまで事前的にである)。

異色でかつ生物多様性つまり複雑系や経路依存性への適用性に道を開き、かつ客観的立場に立つことを主張できるのは第IV象限に属することになったポパーのそれである。ポパーによる確率論の定義は「傾向・可能性の法則」⁴⁰⁾であり、それは、人類を始めとした(生物)種が現行のように多岐に至った、可能性の選択経路(実現していない種も加えて)についての説明に開かれていることが他の確率論と比較して際立った優位性を示しており、決定論を拒否した姿勢と整合的でありかつ一貫したものとなっている。その立場は、中心に位置付けた、A.タルスキーの真理性⁴¹⁾、および、K.ゲーデル⁴²⁾の「不完全性定理=系統性と完全性とは一致しない」世界像と共生・共有できるそれをもっている。

注および参考文献

- 1) 国際書院2000。
- 2) R.M.Rorty (ed.), *The Linguistic Turn-Essays in Philosophical Method with Two Retrospective Essays*, The University of Chicago Press 1967&1992.
- 3) T.J.McDonald (ed.), *The Historical Turn in the Human Sciences*, The University of Michigan Press.
- 4) J.S.Nelson, A.Megill, and D.N.McClosky (eds.), *The Rhetoric of the Human Sciences Language and Argument in Scholarship and Public Affairs*, The University of Wisconsin Press 1987.
- 5) 以下、本文中書名は邦訳がある場合にはその題名を用い、注ではその訳者名・出版社・初版発行年を記し、著者名・原著名・出版社はそれに続く括弧内に記した。
小河原・内田訳、未来社1980 (K.R.Popper, *The Open Society and its Enemies*, Princeton University Press)。
- 6) 久野・市井訳、中央公論社1961 (K.R.Popper, *The Poverty of Historicism*, Routledge & Kegan Paul)。
- 7) 一谷訳、東京創元社1949 (F.A.v.Hayek, *The Road to Serfdom*, George Routledge & Sons)。
- 8) 森訳、岩波現代選書1974 (K.R.Popper, *Autobiography of Karl Popper*, in *The Philosophy of Karl Popper*, vol.1, ed. by P.A.Schilpp, Open Court)。
- 9) 大原訳『グローバル資本主義の危機——「開かれた社会」を求めて』日本経済新聞社1999 (G. Soros, *The Crisis of Global Capitalism*, Public Affaires 1998)。
- 10) 森・大内訳、恒星社厚生閣1971-72 (K.R.Popper, *The Logic of Scientific Discovery*, Hutchinson & Co.)。
- 11) 須田監訳・近藤訳『哲学人 上・下』NHK出版2001 (B.Magee, *Confessions of a Philosopher*, Weidenfeld & Nicolson 1997)。
- 12) M.H.Hacohen, *Karl Popper The Formative Years 1902-1945*, Cambridge University Press 2000.
- 13) 『産業社会の病理』中央公論社1975および『反古典の政治経済学 上・進歩史観の黄昏 下・二十一世紀への序説』中央公論社1992など。
- 14) 中央公論社。

- 15) 渡部訳、三笠書房1992 (F.Fukuyama, *The End of History and the Last Man*, Free Press 1992)。
- 16) E.ゲルナー (加藤監訳)『民族とナショナリズム』岩波書店2000 (E.Gellner, *Nations and Nationalism*, Blackwell 1983)。
- 17) E.J.ホブズボウム (浜林・嶋田・庄司訳)『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店2001 (E.J.Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780 Programme, Myth, Reality*, Cambridge University Press 1990)。
- 18) B.アンダーソン (白石・白石訳)『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』NTT出版1997 (B.Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso)。
- 19) I.Wallerstein, 'From sociology to historical social science: prospects and obstacles', in *The British Journal of Sociology*, vol.51 No.1 January/March 2000.
- 20) 同氏に関する参考とした文献を年次順に以下上げておく。
『国境の越え方 比較文化論序説』筑摩書房1992、『地球時代の民族=文化理論 脱「国民文化」のために』新曜社1995、『国民国家論の射程 あるいは〈国民〉という怪物について』柏書房1998 (また欧州問題については、宮島共編『ヨーロッパ統合と文化・民族問題』人文書院1995、アジアについては、山口・渡辺共編『アジアの多文化社会と国民国家』同1998がある)。
- 21) 講談社。なお田中氏は、ヨーロッパのみならず、西川氏同様、中国・アジア問題に言及し、日本および東アジアの盛衰は「スウパア-ストラクチュア」の構築とその弱体化にあったとし、今後形成されつつある中国を中心としたそれにどう適応できるか、日本のあり方についても、国内諸基準を「スウパア-ストラクチュア」の構築基準に改革できるかどうかにかかっている、としている。
- 22) この項では、以下、参考文献は主として本文中書名を引用した文献を中心に掲げ、他は叙述と関連する代表的な参考書を該当箇所に注番号で示し表記する。また、この項全体に関わる邦訳文献では、G.J.ワーノック『現代のイギリス哲学 ムーア・ワイトゲンシュタイン・オースチン』勁草書房1983およびB.マギー前掲書。また、原典邦訳では、坂本百大編 (土屋・清水・内井・竹尾・山川訳)『現代哲学基本論文集 I フレーゲ・ラッセル・ラムジー・ヘンペル・シュリック・ノイラート・カルナップ』勁草書房1986。同じく、坂本編 (神野・飯田・服部・野家・藤村訳)『現代哲学基本論文集 II ムーア・タルスキ・クワイン・ライル・ストローソン』勁草書房1987。
- 23) 藤本・坂井訳、法政大学出版局1968 (L.Wittgenstein, *Logisch-philosophische Abhandlung*)。
- 24) R.M.セインズブリー (一ノ瀬訳)『パラドックスの哲学』勁草書房1993 (R.M.Sainsbury, *Paradoxes*, Cambridge University Press 1988)。
- 25) R.モンク (岡田訳)『ワイトゲンシュタイン I・II』みすず書房1994。
- 26) 坂本他訳『心の概念』みすず書房1987 (G. Ryle, *The Concept of Mind*, Hutchinson 1949)、および坂本訳『言語と行為』大修館書店1978 (J. L. Austin, *How to Do Things with Words*, Oxford University Press 1962)、および同監訳『オースティン哲学論文集』勁草書房1991 (*Philosophical Papers*, 2nd ed. by J. O. Urmson & G. L. Warnock, Oxford University Press 1961)。
- 27) Wissenschaftliche Welttauffassung: *Der Wiener Kreis*.
- 28) D.ルクール (野崎訳)『ポパーとワイトゲシュタイン: ウィーン学団・論理実証主義再考』国

- 交社1992 (D.Lecourt, *L'ordre et les Jeux*, Grasset & Fasquelle 1981)。
- 29) W.V.O.クワイン (飯田訳)『論理的観点から 論理と哲学をめぐる九章』勁草書房1953 (*From a Logical Point of View : 9 Logico-Philosophical Essays*, Harvard University Press, 1953, 1961rev.1980)。
同 (大出・宮館訳)『ことばと対象』同1984 (*Word and Object*, The MIT Press 1960)。同 (吉田・野崎訳)『哲学事典』白揚社1994 (*Quiddities—An Intermittently Philosophical Dictionary*, Harvard University Press, 1987)。同 (伊藤・清塚訳)『真理を追って』産業図書1999 (*Pursuit of Truth*, Harvard University Press, 1992, 1990)。
- 30) 長尾訳、ハーベスト社1985 (M.Polanyi, *Personal Knowledge:Toward a Post-Critical Philosophy*, Routledge & Kegan Paul 1958 rev. 1962)、および佐藤訳『暗黙知の次元 言語から非言語へ』紀伊国屋書店1980 (*The Tacit Dimension*. Routledge & Kegan Paul 1966)。
- 31) 岩瀬訳『アイデンティティ 青年と危機』金沢文庫1973 (E.H.Erikson, *Identity:Youth and Crisis*, W.W.Norton 1968)。
- 32) J.ブルーナー (田中訳)『可能世界の心理』みすず書房1998 (J.S. Bruner, *ActualMinds, Possible Worlds*, Harvard University Press 1986)。および同訳『心を探して ブルーナー自伝』みすず書房1993 (*In Search of Mind : Essays in Autobiography*, Harper & Row1983)。
- 33) 吉田訳、春秋社2000 (K.Wilber, *The Marriage of Sence and Soul: Integrating Science and Religion*, Shambhala 1998)、およびK.Wilber, *A Theory of Everything : An Integral Vision for Business, Politics, Science, and Spirituality*, Shambhala 2000。
- 34) J.ポーキングホーン (稲垣・濱崎訳)『科学時代の知と信』岩波書店1999 (J.Polkinghorne, *Belief in God in an Age of Science*, Yale University Press 1998)、および本多訳『科学と宗教 一つの世界』玉川大学出版部2000 (*One World : The Interaction of Science and Theology*, The Society for Promoting Christian Knowledge 1986)、また、J.ギドン・G.ボグダノフ・I.ボグダノフ (幸田訳)『神と科学 超実在論に向かって』新評論1992 (J.Guitton, G.Bogdanov & I.Bogdanov, *Dieu et la Science : Vers le Métaréalisme*, Grasset & Fasquelle 1991) も参考となる。
- 35) J.E.Lovelock, *The Ages of GAIA : A Biography of Our Living Earth*, Oxford University Press 1988。
田坂広志編著『J.E.ラヴロック——ガイアの思想——地球・人間・社会の未来を拓く』生産性出版1998。
- 36) I.Hacking, *The Emergence of Probability*, Cambridge University Press 1975. および S.M.Stigler, *The Measurement of Uncertainty before 1900*, The Belknap Press of Harvard University Press 1998)。
- 37) R.v.Mises, *Probability, Statistics, and Truth*, William Hodge 1939。
H.Reichenbach, *The Theory of Probability*, The University of California Press 1949。
R.Carnap, *Logical Foundations of Probability*, The University of Chicago Press 1950。
- 38) R.スキデルスキー (浅野訳)『ケインズ』岩波書店2001 (R.Skidelsky, Keynes, Oxford University Press 1996)、福岡正夫『ケインズ』東洋経済新報社1997、伊藤邦武『ケインズの哲学』岩波書店1999。また、ケインズの原書は、J.M.Keynes, *A Treatise on Probability*, Macmillan 1921。また、ラムゼイに関しては、F.P.ラムジー (伊藤・橋本訳)『ラムゼー哲学論文集 D.H.メラー編』勁草書房1996 (F.P.Ramsey, *Philosophical Papers* ed. by D.H.Mellor, Cambridge University Press 1990)。
- 39) L.Wittgenstein, *On Certainty*, Oxford 1969。
- 40) K.R.ポパー (田島訳)『確定性の世界』信山社1998 (K.R.Popper, *A World of Propensities*,

Thoemmes 1990)。

41) A.Tarski, *Logic, Semantics, Metamathematics: Papers from 1923 to 1938* transl. by J.H.Woodger, Clarendon Press。

42) H.ワン (土屋・戸田山訳)『ゲーデル再考 人と哲学』産業図書 (H. Wang, *Reflections on Kurt Gödel*, The MIT Press 1987)、および R.スマリヤン (高橋訳)『ゲーデルの不完全性定理』丸善1996。

キーワード 俯瞰的科学観 歴史進歩主義 普遍・一般(文明)軸・個別・特殊(文化)軸
論理軸・倫理軸 国際主義(グローバリズム)・国家・国粹主義(ナショナリズム)・地域主義(リジョナリズム)・世界システム
認識体系(パラダイム) 制度文化・精神文化・歴史文化
知識・情報の哲学的世界像 実在性・可能性 真理性・メタ性・確率論
スウパア-ストラクチュア

(Noboru SUZUKI)